

石川県立美術館だより

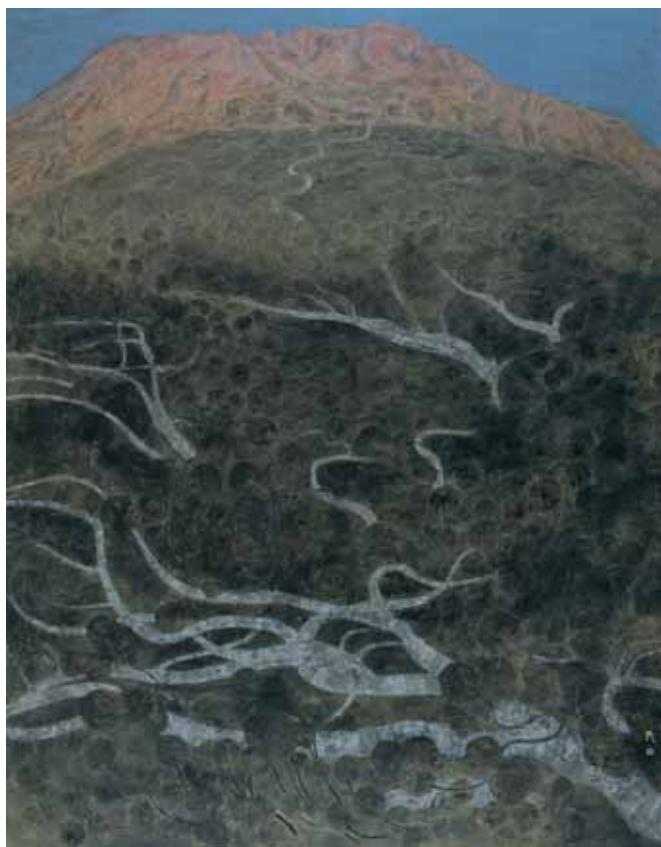
平成19年1月1日発行 第279号

—日本の自然・原風景を描く—
郷土が生んだ日本画家

石川義展



「はりのよの居る世界」平成8年



「大地生々」平成10年 学校法人 金沢学院蔵

1月4日(木)～2月4日(日)
会期中無休

新年のごあいさつ

あけましておめでとうございます。

本年の特別展は、一月には別欄掲載のとおり、金沢出身で日展で活躍されている日本画家石川義氏の画業を回顧する展覧会を開催します。四月から五月にかけてのゴールデンウィーク前後には、文化功労者であった洋画家高光一也氏の生誕百年を記念し、高光氏の師中村研一や高光氏の指導を受けた作家たちを含めての、高光芸術を総合的に回顧する「高光一也の画業」展を開催します。ともに主要作品を当館に寄附された作家であり、本年前半を飾るにふさわしい展覧会になると思っています。

すでにご承知の方も多いと思いますが、本年は九月より約一年間、リニューアル工事のため休館する予定となっています。開館して二十年以上も経過しますと空調設備が老朽化しており、設備部門の全面取換え工事と、ロビー周辺のサービス部門の拡張、収蔵庫の増設などの工事が実施されることになっています。暫くご不便をおかけしますがよろしく願いいたします。

約一年間近い休館中、当館のコレクションを鑑賞する機会が全く無くなってはとの思いから、県内外の美術館や類似する施設で、何回かテーマを決めてコレクションを公開することを考えています。また公共施設を利用して教育活動も積極的に実施する予定で、これらについての詳しい情報は、本紙や報道機関を通して広報する予定でいます。多くの方々のご参加を心からお待ちしています。

館長 嶋崎 丞

目次

- ◆石川 義展……………2
- ◆茶道具と名物裂……………3
- ◆新春を寿ぐ—古美術優品展— ……3
- ◆万国博覧会の時代—明治の工芸— ……4
- ◆石川ゆかりの京都の日本画家たちⅡ ……4
- ◆ミュージアムレポート……………5
- ◆主な展示作品……………5
- ◆展覧会回顧、行事案内……………6
- ◆講演会記録……………7
- ◆所蔵品紹介……………8

(第7～9展示室)

- 日本の自然・原風景を描く -

郷土が生んだ ^{いし かわ ただし} 石川 義展
日本画家

1月4日(木)～2月4日(日) 会期中無休



山肌の輪廻(左隻)
平成6年 当館蔵

石川氏はこれまで、四季折々に変化する、美しく神秘的なわが国の自然に魅せられ、対象から受ける感動を日本画という伝統的な手法で画面にとらえようと努めてきました。それは、北は北海道・網走から、南は九州・屋久島まで、日本の原風景ともいえる、こころの故郷を求めての旅であったともいえます。

本展は、大きく三部で構成します。

第1部「深遠なる自然美の世界」では、山岳、湖沼、海岸、山里など、そこに立つ人間を包み込むような、雄大で深遠なる空間の広がりをとらえた作品を展示します。昭和27年の日展初入選作「杉」、34年の日展特選作「礁」、55年の日展会員賞受賞作「山里」、平成13年の日展文部科学大臣賞受賞作「経堂への道」など、日展出品の代表作を中心にご覧いただきます。

第2部「杉の輪廻」では、杉の生長する姿をじっくりと対話するように見つめ、包み込むような温かさをもつて描いた作品を展示します。平成6年に石川氏は、『杉』をテーマにした個展を開きましたが、その時出品された屏風の大作や、石徹白杉(岐阜県)、縄文杉(鹿児島県)、御佛供杉(石川県)、大杉(高知県)などの名木を描いた作品も含まれています。

第3部「生きものたちの饗宴」では、自然の中に見出される、さまざまな個性をもった生きものたちの生命の鼓動を感じ取りながら絵筆に託した、ほのぼのとした雰囲気のある作品を紹介します。昭和53年に石川氏は、日本画の研究グループ「玄」を結成しますが、そのグループ展に出品された作品の中には、自然の中に息づく生きものの姿が見られ、魚や鳥、爬虫類といった小さな生命の存在を細やかな筆致でとらえています。

またこのほかに、日展出品作の下絵もあわせて展示します。これらは現地において、モチーフを目の前にしながらの制作ということもあり、生き生きとした濃厚な描写となつているのがわかります。

以上、初期から最近作まで代表作をまとめて展観することで、石川芸術の真髓に触れ、わが国の自然の美しさ・豊かさを再認識していただければ幸いです。

石川義 略歴

- 昭和5年 金沢市に生まれる。
- 昭和18年 金沢二中に入学。
- 昭和27年 第8回日展に初入選。
- 昭和28年 堂本印象の主筆する画塾・東丘社に入塾する。
- 昭和29年 金沢美術工芸短期大学(現・金沢美大)修了。京都へ転出。
- 昭和34年 第2回新日展で特選。
- 昭和43年 第11回新日展で特選。
- 昭和44年 改組第1回日展で菊花賞を受賞。
- 昭和48年 改組第5回日展で新審査員を務める。(以後、第12回、第18回、第25回、第31回展で審査員)
- 昭和53年 日本画研究グループ「玄」を結成する。
- 昭和55年 改組第12回日展で会員賞を受賞。
- 昭和57年 「杉のテーマ屏風展」を開催する。
- 昭和63年 日展評議員に任命される。
- 平成4年 「山河悠久 石川義個展」を開催する。
- 平成6年 「杉の輪廻 石川義展」を開催する。
- 平成12年 金沢学院大学の日本画教授に就任する。
- 平成13年 改組第33回日展で文部科学大臣賞を受賞する。
- 平成16年 金沢学院大学名誉教授となる。
- 平成17年 石川県立美術館に日本画70点、スケッチ9点を寄贈する。金沢へ転居。



三筋の道 昭和54年 金沢美術工芸大学蔵



礁 昭和34年 平野美術館蔵

今月のコレクション展示室

(前田育徳会展示室)

特集 茶道具と名物裂

1月4日(木)～2月4日(日) 会期中無休

加賀藩前田家に伝わる茶道具と名物裂を紹介します。

前田家の茶道は、藩祖利家が利休や織田有楽に学んだことに始まり、三代藩主利常の時、京都より仙叟宗室を招いて以降、藩内に広く普及することとなります。歴代藩主は、名物を始めとする茶道具を多く所持し、茶の湯に親しみました。こうして伝えられた茶道具は、現在も前田育徳会に所蔵されており、今回は名物裂とあわせて展示します。

玳皮蓋天目茶碗は、加賀藩前田家の家紋である梅模様様が黒釉で散らされた茶碗です。玳皮とは、海亀の鱧甲の和名と思われ、黒釉と灰釉の二種掛けによって表れた斑模様の趣から、こう名付けられました。名物と称された尼ヶ崎台は、摂津国の尼崎に漂着した唐船から入手したと伝えられることから、このように呼ばれています。朱漆で台の内側に、ムカデのような印のあることが特徴です。挽家に小堀遠州による銘の入った古瀬戸茶入、銘孫六は、茶入の上半分にたつぷりとかけられた瀬戸釉が見事です。その葉溜りが孫六の剣の焼刃のように見えることから、この名が付きました。呂宋壺としてもはやされた茶壺、銘春の日は、その銘のとおり春の温かな光を思わせるやわらかな釉調が特徴です。

一方、舶来の裂として人々を魅了した名物裂は、茶道の隆盛とともに裂が茶入の仕覆や書画の表装に用いられ、特に茶人によって愛好された裂は、固有の名で愛でられるようになりました。例えば、一茎の花咲く樹木とそれを振り返った兔の姿の模様がほどこされた角倉金襴は、江戸前期の京都の豪商・角倉了以の愛用裂として、細い蔓の花唐草模様の中に龍の姿が散らされた躍動的な模様を持つ珠光緞子は、室町時代の茶祖・村田珠光の愛用裂として、石畳に区切られた白と縹色の地色に牡丹花と七宝模様が大きく施された遠州緞子は、江戸初期の大名茶人・小堀遠州の愛用裂として知られています。

本特集では、こうした前田家に伝わる茶道具二十四点と名物裂十九点を紹介します。

新しい年を迎えました。日本人にとって、元日には特別な意味がありました。それは、昨日が今日になる、去年が今年になるというただけではなく、すべてが新たに一から始まるという神聖な日であり、特別な日と考えられています。ところが、今日のような高度情報化社会のなかで、日々の時間に追われている現代人には、新年を迎えるという「節目」の感覚が非常に希薄になってきているように思われます。それゆえに、この「節目」に先人が培った奥深い日本文化を再考し、心豊かに生きる術を見つめ直す機縁とすべきではないでしょうか。

新春といえは茶道の世界では初釜の季節です。当館の茶道美術は山川コレクションがその核を成しています。このコレクションは、金沢の素封家山川家が三代にわたって収集伝世したものです。言うまでもなく野々村仁清の国宝「色絵雑香炉」は山川家の初代甚兵衛の収集です。このコレクションの特色は、香合の質の高さとその種類の豊富さにあります。「和蘭陀白雁香合」(県指定文化財)は、オランダのデルフト窯で作られ、江戸時代初頭にわが国に舶載しました。その優雅で愛らしい趣きが好まれ、茶人が香合に見立てたもので、古来より名高い名品です。また、仁清の「色絵花笠香合」は、仁清の技の冴えを示す薄作りでシャープな器体に、青、赤、緑の彩色と金彩を駆使した艶美ともいえる華やかな作品です。そのほか、仁清の「色絵梅花図平水指」(重要文化財)、「交趾金花鳥香合」、「青貝福祿寿図香合」、「初代宮崎寒雄の「福寿海尾垂釜」をはじめ、絵画、書、花入、茶入、茶碗など新春にふさわしい茶道具とともに、「友禅宝船文のれん」、「七人狸々図」、「三福神図」など新春を寿ぐ吉祥の作品をあわせて約三十点展示します。

茶道という日本文化の精神性を象徴する美とともに、新たな年の始まりを感じていただければ幸いです。

(第2展示室)

特集

新春を寿ぐ - 古美術優品展 -

1月4日(木)～2月4日(日) 会期中無休



七人狸々図 狩野常信筆

今月のコレクション展示室(第5展示室)

特集 万国博覧会の時代
- 明治の工芸 -

1月4日(木)~2月4日(日) 会期中無休

「蒔絵蒔に小鳥図額」
柴田是真

江戸幕府による武家政権が崩壊し、新政府へと移行した激動の明治時代。欧米のシステムが取り入れられていく中で、それまでの社会制度とともに生活習慣、芸術文化までが否定的な解釈を受けて廃れ、さまざまな身分や立場の人々が、方向転換を余儀なくされました。

武家社会を彩り、江戸文化の粋の中核を成していた、絵師や美術工芸品の職人たちも例外ではなく、最大のパトロンであった武士たちからの注文が途絶えて、まさに危機的な状況に立たされました。そんな中で国策としてとられた殖産興業により、再びその技術を発揮する機会が訪れました。それが一八五一年、ロンドンにおいて第一回が開催された万国博覧会です。

江戸時代以来の優れた技による、日本の伝統的な美術工芸品は、明治六年(一八七三)のウィーン万博において好評を博しました。このことにより、輸出品としての日本の工芸品に目を向けた新政府は、よりアピールする作品を作るために、職人たちに積極的な指導を行います。石川県はこうした施策に対して、早くから地域的な取り組みを行っていました。

明治五(一八七二)年には金沢博覧会を開催し、石川勸業場を設置、続いて金沢銅器会社の設置や、金沢工業高校の開校など、江戸時代からの伝統工芸の復興と発展を目的としたシステムが出来上がりました。当館の所蔵品にこの時代の資料が充実しているのは、こうした背景があったことによります。

今回は江戸から明治にかけての激動の政変をくぐり抜けた漆工芸家の一人、柴田是真による漆の額と、漆絵の画帖を展示します。幼い頃から研鑽を積み、帝室技芸員に上り詰めた是真の作品を観ると、明治の工芸は単なる江戸時代の模倣ではなく、優れた芸術家を生んだのだと再認識することが出来るでしょう。

昨年度、コレクション展示室において「特集 石川ゆかりの京都の日本画家たち」をご覧いただきましたが、今回、企画展示室で行われる「石川義展」の会期に合わせて、そのパートを開催することになりました。石川義氏は金沢に生まれ、大学修了後、京都を拠点に活躍してこられました。古い文化の伝統を受けつぐ京都の地は、今日まで日本画の創造活動の一大拠点として、わが国の日本画壇をリードしてきたといえます。当県からも、石川氏に代表されるように、日本画家を志す多くの若き俊英たちが、京の地に赴き研鑽を積んだり、逆に京都の精鋭たちが当県を訪れ若手の指導にあたるなど、活発な交流が行われてきたのです。本展では、左記の作家を取り上げます。

当県出身で京都の大学に学び、その後、京都に定住して活動してきた作家

安嶋雨晶(明治40~昭和48・白山市生)

曲子明良(昭和22~かほく市生)

大沼憲昭(昭和29~金沢市生)

金沢美術工芸大学で教鞭をとった、京都在住の作家

西山英雄(明治44~平成元・京都市生)

曲子光男(大正4~北海道生)

山本知克(昭和2~平成15・京都市生)

金沢美術工芸大学で学んだ後、京都を拠点に活動してきた作家

石川 義(昭和5~金沢市生)

由里本出(昭和14~京都市生)

坂根克介(昭和20~大阪生)

沢野慎平(昭和22~京都市生)

鹿見喜陌(昭和23~大阪生)

山本 隆(昭和24~輪島市生)

以上、十二作家の力作を、館蔵品の中から十七点、一堂に展示しますので、洗練された日本画の美を、どうぞご堪能下さい。

今月のコレクション展示室(第6展示室)

特集 石川ゆかりの
京都の日本画家たち

1月4日(木)~2月4日(日) 会期中無休

「火焰山」
西山英雄



双樹 村田省蔵



少年 岩山豊郁

今月のコレクション展示室 主な展示作品

1月4日(木)～2月4日(日)

= 国宝 = 重要文化財 = 重要美術品
= 石川県指定文化財

前田育徳会展示室

茶道具と名物裂

玳皮蓋天目茶碗(梅花天目)

名物 尼ヶ崎台

流水梅花模様綴子(織部綴子)

第1展示室

色絵雌雄香炉

色絵雌雄香炉

野々村仁清
野々村仁清

第2展示室

新春を寿ぐ―古美術優品展―

色絵梅花図平水指

和蘭陀白雁香合(デルフト窯)

古今集巻第十八断簡(本阿弥切)

野々村仁清
伝小野道風

第3・4展示室

【油彩画】
雪後の湖畔

【彫刻】
双樹

少年

裸婦

塗師祥一郎
村田省蔵

岩山豊郁
土田実

第5展示室

万国博覧会の時代―明治の工芸―

色絵金彩八仙人花鳥図大花瓶

漆絵画帖

鉄打出狛犬大置物

九谷庄三
柴田是真
山田宗美

第6展示室

石川ゆかりの京都の日本画家たちⅡ

太夫

火焔山

岩壁

坂根克介
西山英雄
曲子光男

観覧料

個

人

団体(20名以上)

一般 350円	大学生 280円	高校生以下は 無料	一般 280円	大学生 220円	高校生以下は 無料
------------	-------------	--------------	------------	-------------	--------------

ミュージアムレポート

キッズ☆プログラム 鑑賞講座 「大場松魚展を鑑賞しよう」 10月7日(土)



小学生を対象としたコレクション展示室鑑賞講座です。今回は「卒寿記念 人間国宝 大場松魚展」を鑑賞しよう」と題して蒔絵で重要無形文化財保持者(人間国宝)大場先生の特別陳列を鑑賞しました。

はじめに大場先生について少しお話しをしたあと、箱のデザイン、面と面のデザインのつながりを考え、実物大に切った黒紙の展開図に白鉛筆で宇宙のイメージを簡単に描いてみました。展示室内に移動して、作品(箱)に描かれている模様を見つけて描いてもらい、どのような模様が描かれて、それらがどのような材料で出来ているかをみました。「はっきりみてもらいたいから金の板(平文)で表現したのかな?」「青色がきらきら。貝を使って黒の中で光ってみえる」と細かな表現にまで興味深く鑑賞できたと思います。

次回の鑑賞講座は2月3日(土)「明治の工芸を鑑賞しよう」です。この機会に私たちとたくさんの方の美術に親しみましょう。



展示の古美術の肖像画は、今日と異なり昔の人物で、しかも肖像画が描かれるというだけあって、描かれる人物には、当時の有力武将やその夫人、また著名な文化人や高僧の像が並ぶものです。

有名人が多いということもあって、ギャラリートークの参加の皆様には、描かれた人物への関心も高く、また描かれる人物が生きた時代などの歴史もよくご存知の方も多く、かなり専門的なご質問もあり、担当者としても教えられる内容の多い日となりました。

今回の出品作品は、類型化されることも多い古美術の肖像画の世界にあって、絵師が、描く人物に接し、詳細に人物の表情や人となりなどを捉えようと試みて描いた、と思われるような作品が多いことが特徴です。

展示室では、描かれた人物の様々な表情や姿をご鑑賞いただくとともに、画中に描きこまれた、当時の風俗や衣類の文様など歴史資料としても貴重な肖像画の世界の魅力に改めて感じていただけたものと思います。

ギャラリートーク
「北陸の肖像画」

展覧会回顧

人間国宝

松田権六の世界 9月29日～10月29日

今回の展覧会は、主管課から入場者の数値目標を提示されるという、厳しい状況からスタートしました。近年美術館・博物館の運営には、これまで「経営」としての視点が欠けていたのではないかというご意見を、様々な機会に伺うことが多くなりました。そこで石川県立美術館としても、こうしたご意見を真摯に受け止めるとともに、会期1か月で1万人という、近現代工芸の展覧会ではかなり高い入場者目標を達成するため、様々な取り組みをいたしました。

その第1は、広報の方法を見直すことでした。従来、新年度の展覧会の概要が明らかになるのは3月でしたが、まず今回は特別にチラシ、プロモーションビデオを作成し、それよりも早い時期から広報活動を行いました。第2に、その際にマーケティングの視点を導入し、各報道機関、旅行業者に加えて、県内はもとより全国の漆器関係の組合、団体に重点的に広報を行いました。

その結果、全国から反響をいただき、その中には松田権六の新資料の発見、そして展覧会での初公開に至ったものもありました。さらに有難かったのはNHK金沢放送局が展覧会企画を機に、「北陸スペシャル」の枠で番組を制作されたことでした。この番組は、放送エリアが順次拡大されてゆき、本館の事前広報との理想的な相乗効果を生みました。

次に、より多くの方に来場していただくために石川県立美術館が取り組んだことは、展覧会の構成を吟味する

ことでした。松田権六の大規模な回顧展は、新旧の石川県立美術館で過去2回開催されています。そこで今回の大きな課題は、どのようにして差別化を打ち出すかということでした。松田権六は、「人に学ぶ、物に学ぶ、自然に学ぶ」を生涯のモットーとしていました。今回目標としたのは、展示によってその姿勢を構成することでした。ここでは、旭山動物園の成功事例に見られる行動展示の考え方も大いに参考にしました。

特に、松田が物言わぬ師としての古典作品から学ぶことの重要性に開眼した原点である、いわゆる楽浪漆器の出品に関しては、所蔵者の東京大学の御厚意により、今回の展覧会に大きな光彩を添えることができました。こうして、「松田権六の世界」には目標を上回る約12500人の方が来場されました。出品者、鑑賞者をはじめ、共催、協力、後援いただいた皆様に改めて深く御礼申し上げます。



1月の行事案内 《入場無料(ギャラリートークを除く)・いずれも午後1時30分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
1/7(日)	月例映画会	甞る文化財 表装の技術 (48分)	ホール
1/13(土)	ギャラリートーク	新春を寿ぐ-古美術優品展- (高嶋清栄学芸専門員)	第2展示室
1/14(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物27 天平の技を伝える (34分) 正倉院宝物28 よみがえる音色 (33分)	ホール
1/20(土)	美術講座	万国博覧会と日本美術の変容 (寺川和子学芸主任)	講義室
1/21(日)	月例映画会	水墨画 (22分) 宗達・空間の魔術師 (23分)	ホール
1/27(土)	美術講座	京都の日本画 (末吉守人学芸第一課担当課長)	講義室
1/28(日)	ビデオ鑑賞会	正倉院宝物28 よみがえる音色 (33分) 正倉院宝物29 秘宝 公開への道 (33分)	ホール

講演会記録 「日本画と私」

講師：百々 俊雅氏（日本画家）



今日の題名は「日本画と私」ということですが、日本画という歴史もあり難しいことでもありますので、なぜ私が日本画に進んだのかということをお話しさせていただきます。

絵が描きたくて

私が小学校1年の時、終戦になりました。そのころから絵が好きで疎開先でも一人で描いていました。小学校から中学校とずっと油絵を描いてまして、高校の美術の先生は日本画をやっておられる方でしたが、私は油絵を描き慣れていたので高校に入ってからずっと油絵を描いておりました。

西山作品との出会いと初めての日本画制作

そのころ、父が朝日新聞に勤めておりましたので、毎週アサヒグラフや週刊朝日が届いていました。その中に絵描きさんの絵とかデッサンが載ってまして、それを楽しみに見ていました。梅原龍三郎さんとか安井曾太郎さん、宮本三郎先生とか小磯良平さん、やはり洋画が好きでした。

高校2年の時、その中に日本画の西山英雄先生の絵とデッサンが載っておりまして、そのデッサンが躍動的で、すごく迫力ありまして「日本画の絵描きさんでこんなに激しい絵を描かれる人がいるんだな。」と衝撃を受けました。それからよく日本画を見るようになりました。

油絵と日本画と迷いましたね。まして高校の先生が、日本画の先生でしたから。すると3年生になった時に、その先生が「大阪府の高校の絵画展があるから、君一度これで日本画を描きなさい。」と言って、絵具を貸してくださいました。初めて見る岩絵具の美しさにびっくりしてね。これを使わせていただける。よしいっぺん描いてみようということで、膠の溶き方から教えていただいで50号位の絵を一枚仕上げました。

それがたまたま大勢の出品者の中から評議員賞をいただきました。それから病みつきになりまして、日本画ばかり描くようになりました。

浪人時代、そして美大合格

絵が描きたいので美大へ行こうと、今京都芸術大学になっています京都美術大学を受けたんですね。私の人生もつまずきばかりですけど、友達4人で受けて私だけ落ちたんです。絵が描けないというのがショックでしてね、もう一年浪人させてほしいと親に頼みました。

浪人時代ずっと西山先生の絵が忘れられなくて、「いつかは教えていただきたい、（自分の絵を）見ていただければありがたいな。」と夢に思っていました。

3年目、金沢美大では受験に木炭デッサンの試験があります。そこで親に頼んで大阪の四天王寺美術館の地下にある研究所に通いました。とにかくデッサンがしたいものですから、朝一番行って場所を取ります。掃除のおばさんが入れてくれて、場所取りして掃除して、そんな毎日でございました。それで12月のコンクールでトップになりまして、うれしかったですね。あの浪人時代に

半年、美術館の地下で勉強したことが本当によかったと、今もそう思っております。今の受験生も夢を捨てずにがんばっていただきたいと思います。

それで2年浪人して3年目に合格しました。入ってから、原田教授と下村先生、それから平桜先生に、じっくり基本から教えて頂きました。

師との出会い

美大卒業の時、サラリーマンは忙しいから絵が描けないと聞いていました。それでもへそ曲がりなので、一般の会社に行きたい。苦勞してでもいいから絵を描こうと、思っているときに丁度父が朝日新聞の広告デザイン室を受けてみなさいと。それでまあ入ったはいいんですが、厳しくて、毎日毎日残業でした。

そのころ私の同級生に一人優秀な子がいて、東京の伊東深水先生の塾に入りました。それを聞いたら食事が一週間出来なかったくらいですね。私は西山先生の所へ行きたいから、いろんなつてをたどりまして。やっと、福本達雄先生のお世話で日展の研究会に写生を持っていきまして。胸がどきどきしてね。

（西山先生が）座るなり「あれ誰だ」と。「これこれこういう者です」ということで絵を見ていただきました。先輩方は外国へ行って描いてきたスケッチを20枚30枚と大きな画用紙で見せなさるんです。ところが私はそれだけスケッチがないので「これしかないのか、それじゃこれにしなさい。」と一言も返ってこない。ですから皆さんものすごくスケッチなさいます。写生というのがやはり鍛えられましたね。それから、朝の4時まで絵を描いて、4時間寝て新聞社に入って、その連続でした。

再び金沢へ

学生運動の頃、西山先生が京都教育大学の教授を辞められて、すぐにその後金沢美大の教授になられました。びっくりしてね。自分の母校だからすごくうれしかったですね。

先生が美大を定年になる2年前ですか、「君と長いことつきあっているけど、未だに奥さんの顔見たことないから、一緒に来なさい。」と言うことでお邪魔しましたら「君、朝日新聞でずっと勤めていて、社長になれるか。」「いえとんでもない、部長にもなれません。」と喋って話してましたら、「そしたら辞めろ」と。「私があと二年で定年になるから、それまでに勉強してこい。」と言われたのです。新聞社にいれば本当に3、4時間しか絵が描けない。美大に行けば大変ということはおわかっていたけれど、これは描けるという想いだけでお願いしました。

それでこちらへ来て、その時には下村先生や平桜先生がご苦勞なさったと後でわかり、本当に今でも感謝しております。もう一つは美大の時にうちのクラスは優秀で一生懸命勉強しまして、一人はプロになり、また、前さんが人間国宝になられました。やはり絵を描いてみんなで頑張ったというのが勉強になりました。今もそれがあって頑張れるのかなと思っております。

（以後スライドを映しながら作品の説明を行いました。）

（「日本画家 百々俊雅の世界」にちなんで9月3日に当館ホールで行われた講演内容を、当館の責任で要約したものです。）

仙蓋瓶は盛蓋瓶ともいわれ、その語源や意味は明らかではありませんが、水注あるいは酒注として作られたものと思われます。金襴手とは色絵の素地を焼き上げた後に金箔や金泥で文様を焼きつけた、その豪華な美しさが染織品の金襴と似ていることから、わが国では金襴手と称して珍重しました。明代の嘉靖年間(1522～66)に景德鎮の民窯で完成され、わが国では桃山時代から江戸時代初期に舶載し珍重されました。扁平な胴に細長く伸びる華奢な注口や把手が付けられ、狗のような動物の摘みをもつ共蓋付の姿には異国風な趣がありますが、これに近似する金属器がイスラム圏に見られ、明代の仙蓋瓶にその影響が反映しているようです。

この作品は両側面に牡丹鳳凰文が主文様として配され、それ以外の部分を七宝文、蓮華文、蕉葉文などが全面を埋めています。蓋の欠失や金彩の剥落などから完品とはいえませんが、茶の湯の美意識からすれば、それがかえって味わい深い趣となっています。茶室では見立てによる花入として床を飾ります。

箱の蓋表に「赤絵水次/金らん手」、側面には「赤絵水次」と墨書があり、当館の茶道美術の核をなす山川コレクションの一点です。(現在、第2展示室で開催中の「新春を寿ぐー古美術優品展ー」に展示しています。)



こあかえきんらんでせんさんびん けいとくちんよう
古赤絵金襴手仙蓋瓶 景德鎮窯

明時代 16世紀

幅16.0 底径8.3 高23.0(cm)

ミュージアムショップ通信

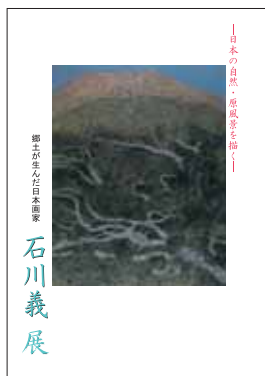
新年明けましておめでとうございます。

昨年はニュースを見れば、教育問題や人命を軽視した事件、国際的にはテロが後を絶たず、暗い気持ちになることが多かったように思います。今年は明るく希望にあふれた年にしたいですね。美しいものを愛で、心を耕していくことが大事なんだ、国際社会もその根底には文化の交流が必要なんだ、と美術館の持つ役割を再認識させられます。

さて、本年初頭を飾る当館企画展「日本の自然・原風景を描く - 郷土が生んだ日本画家 石川義展」がいよいよ開催されます。金沢に生まれ育ち、日展評議員として活躍する日本画家、石川義氏。氏の作品の前に立つとき、自然の静けさに息をつめたり、懐かしい風景にほっと気持ちが和んだり、絵を見る楽しさを改めて思い出して頂けるのではないでしょう。

現代日本画の素晴らしさを再認識できる展覧会です。どうぞ図録にてお手元でも堪能してください。

石川義展図録



次回の展覧会

特集 能面と能装束
(前田育徳会展示室・第2展示室)
2月8日(木)～3月4日(日)

特集 高光一也
画業60年の軌跡(第4展示室)

特集 伝統九谷焼工芸展
30年の精華(第5展示室)
2月8日(木)～3月25日(日)

休館日：1月1日(月)～3日(水)

石川県立美術館だより 第279号

2007年1月1日発行

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号

TEL 076(231)7580 FAX 076(224)9550

URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>